化学の時間、いつもと同じ様に調子で授業。
黒板に書かれたのを
ノートに書き写しながら話を聞く。
最後に小山先生一言、曰く、
「皆、高校二年まで、教科書とノートを
残して置けよ、また、習うしなあ。」
二年先のこと、鬼が笑うと思った。
しかし、ちょっと待てよ、
数えて見ると、そう遠くはない。
高校二年の一学期、四月までは、
今から、たったの十三ケ月である。
体育は、バスケット・ジャンプ・シュートの試験。
五本中、たった一本しか入らない。
福田のボールが右目にあたり、そこだけが赤くなった。
どうも、去年の秋にせよ、今度にせよ、右目ばかり災難受ける。
僕は左目だけでものを見ているのだろうか。
福田が謝りながら、稲村と一緒に言う。
「目がうるんでいる様で、魅力的だよ。
こっちの目も当てたろか、男前になるど。」
僕は、「何、ぬかすとる！」とどなる。

71 何やあ、そんなのあかへんわあ・・・・・・・・・316

萩原良昭